

職員室から・・・

2008, 10,
新潟青陵幼稚園
加藤由美子

「お化け屋敷やってま～す。来ませんか～」と青ばらのY君が誘いに来てくれました。

「どこでやってるの?」「青ばら2組の部屋だよ」これは面白そう!とさっそく行ってみると、廊下にはチケットが広げられていて、Y君とD君「だれとくる?」私「私ひとりだけだけど・・・」と答えると、たくさんのチケットの中から、一人用のチケット(四角が一つ描かれているもの)を選んで渡してくれました。(チケットは2人用とか3人用など、数種類用意されていました。面白いアイデアですね。)

入り口に行くと、Aちゃんが「どうぞ～」と中へ案内してくれて、中に入ってみると、皆座ってお行儀のいいお客様になっています。そしてままごとの家にお化けたちがいました。(お化け屋敷といえば 通路を通って行って、途中にお化けが出てくるものと思い込んでいたので・・・私、固定観念ですね、子どもたちの発想に、なるほど!という思い)

ままごとの家の中には、顔を布でおおった気味の悪いお化けが一人立っていました・・・気がつくともう一つのみまごとの家からは、気味の悪い声「う～～～～お～～～～」そしてガチャガチャという音(効果音まで考えられていました)そして時折、ポーンとお化けの家からなにやら飛んできたりして……よく考えるな～と感心!よく見てみれば、このお化け屋敷をやっているのは、青ばら1組と青ばら2組さんが混じっていました。

クラス替えをして、1組も2組も、“みんなが友だち”といった様子になって、これもまたうれしい出来事でした。子どもたちが分け隔てなく関係を作ることができるように成長したことがうれしいです。

担任たちもお客になって笑いながら……でも一人ひとりの参加の仕方(どんな発想をしているか、どのように人とかがかかわっているか、自分の役割を意識しているか、友だちの中でどんな行動をとっているかetc)を見ながら一人ひとりの姿を把握し、一人ひとりの指導に生かしていきます。

青ばらのお化けさんが、とっても楽しそうにしているので、赤ばらさんのお客様もにっこにっこで見えていました。楽しいお化け屋敷・・・お化けがニコニコしながら顔を出したり引っ込めたりしていたのですが、ときどき、ぽ～んと飛

ぶ怪しいものがだんだん多くなってきて、散らばってきて……効果音を担当していた女の子たちの家の布が崩れて、ガチャガチャの音の元のなるのが見えてきました。ん?これは!と思った頃、やはり担任も「そろそろお片づけね」と言って終わりを促しました。せっかくなのでいいアイデアで遊びが創られていたのだから、その遊びのイメージをそのまま守るために、めちゃくちゃになる前に止めたのです。お化け屋敷の進行役をしていたYちゃんが「おわりで～す」といって、みんな片付け始めました。

私の隣に座って見ていた白ばらのMちゃんに「おもしろかったね」というと「う～ん、でもお化け、ちょっとしかでてこなかった・・・」うふ、・・・

こうした遊びは、子どもたちが自分の体験を元に、再現し、工夫を加え、展開させて遊びを創造していきます。この遊びの中には、自分の考えだけではなく、友だちにも「こういうふうにして」と伝えて“気持ちを合わせる”ことが必要です。また、“友だちの考えを理解し、それに対して自分の考えを言って、一緒に相談する”、あるいは“自分の考えを言ってみただけ、より面白くするために、我慢して譲ってみたりする”が必要になりますね。ここに言葉の発達、人間関係の発達、そして共同・協力する力が必要になります。

チケットを作るときには、どんな紙をつかうか、どういうデザインにするかを考え描く、そこには数字も必要になるかもしれません。細かなことまでいえば、手先の動き、お化けを表現するための発想、音を表現する感性、……等々遊びの中には、こうしたさまざまな学びがあります。これが、子どもたちが自らやりたいことをやっていることで、喜びをともなった学びとなり真の力となるのです。やらせられたことは、喜びが伴わないために、子どもの発達に組み込まれないのです。

こうした遊びは、“ただの遊び”と思われがちですが、実に豊かな内容を含み、子どもたちの真の力となるための、重要な学びなのです。